

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子  
『氣鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画』

## 20世紀 歌人群像

問もなく21世紀。近代短歌から現代短歌へ…  
短歌はこの一〇〇年でどのような足跡を  
残してきたのだろうか。  
この時代を生きた歌人にスポットをあてて  
20世紀の短歌を検証する

### 第一章 人と時代

塚本邦雄は大正一一(一九二二)年、滋賀県神崎郡に生まれた。  
年譜によれば、一三歳のころには、『聖書』『ブレイク抒情詩集』  
『万葉集』などを濫読。一五歳で『赤光』『桐の花』『みだれ髪』  
に出会って心酔した。昭和一五年、彦根高商に入学するも商業  
科目に興味をもたず、専らフランスの文学、映画、音楽などに  
耽溺したという。一七年、呉海軍工廠に徴用され、そこで終戦  
を迎えたのは二三歳の時で、同じく年譜には「八月六日、広島  
被爆の様子を呉より遠望する。」とある。戦後は商社に勤務。



18

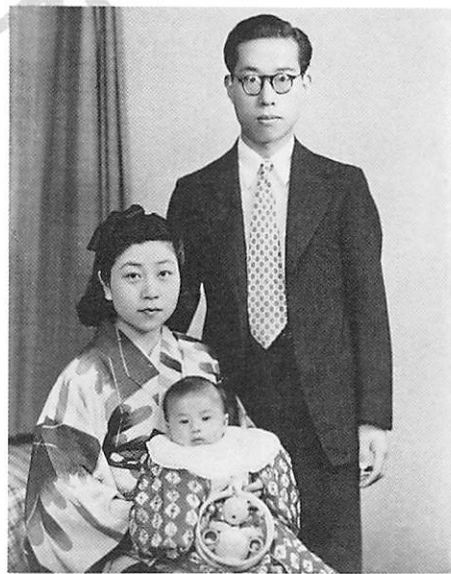
## 塚本邦雄

米川千嘉子

塚本が初めて短歌の結社「木槿」に入るのは、呉に徴用された一七年、二〇歳の時で、二年後には「青櫻」に参加、同人となる。二二年、前川佐美雄の「日本歌人」に入会。そこで杉原一司を知り、二四年に同人誌「メトード」を創刊（翌年五月、杉原逝去。「メトード」は二月まで七号を発行）。二六年には「短歌研究」のモダニズム特集に「弔旗」一〇首を発表、さらに第一歌集『水葬物語』を刊行したが、その世界の新しさがただちに理解されることはなかった。しかし、短歌の世界を革新する新人を求めていた「短歌研究」編集長中井英夫の目に止まることとなり、同誌を中心に活躍の場を広げていった。二九年、肺結核により二年間の自宅療養生活を余儀なくされる中、三〇年の岡井隆との出会いは相互に大きな影響をもたらした。三一年、第二歌集『裝飾樂句』、三二年『日本人靈歌』、三六年『水銀伝説』など次々に刊行。近代の写実主義、あるいは私的現実の告白に決別し、明確な方法論と絢爛たる美学のなかに、短歌表現における思想性と批評性、新しい韻律の可能性を示す前衛短歌の出現であった。

そして塚本の方法と美学が、より先鋭な政治性と行動性をもつ岡井隆と相互に刺激しあい、並走したことで、前衛短歌は三〇年代の若手歌人たちにいつその広がりを持ち、運動としての様相を呈しつつ、同時代とそれ以降の短歌史に絶大な影響力をもつことになっていく。塚本、岡井、寺山修司、春日井建ら十名による同人誌「極」の創刊や、共同創作詩劇ハムレットな

慶子夫人・長男、青史と（昭24年）



ど、短歌表現が新しい場と可能性を求めたところにさまざまな試みが企画され、塚本はその中心となった。塚本邦雄が世代的にはいわゆる戦中派であり、フランス文学や聖書、日本の古典その他幅広く文化芸術ジャンルに精通しながら、敗戦とその後の戦後社会における人間と世界への懐疑や思索の中で、自己の詩の方法と主題を発見していったことは、歌人の出発点にして核である。そして、そうした歌人の起点としての個人的来歴を含めて、その私生活と作品は徹底して隔てられており、その後の作歌活動を個人史に重ねることはほとんど意味をなさない。

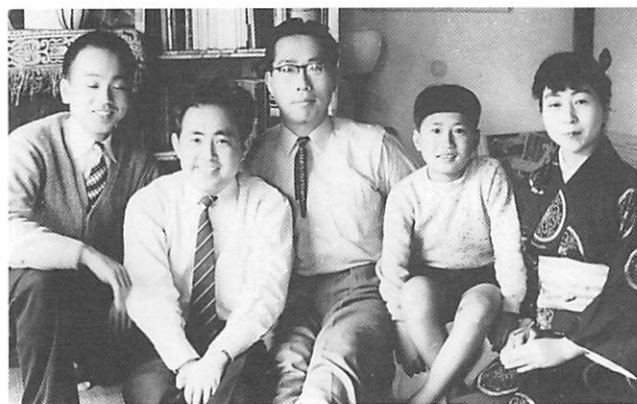
その後も、『緑色研究』『感幻樂』『されど遊星』『閑雅空間』『天変の書』『歌人』『詩歌変』『不変律』『波瀾』『魔王』『献身』など、多くの歌集を上梓。独自の美意識を反映させた小説も少なくないが、作品と表裏をなす態度と方法を鮮やかに提示した『夕暮の諧調』『定型幻視論』などの評論、そして新古今を中心とする古典評論や斎藤茂吉短歌の鑑賞『茂吉秀歌』も重要な仕事である。『茂吉秀歌』が発見したのは、幻想、幻視する歌人としての茂吉であった。四九年、五〇代の初めで退職し、執筆に専念。六一年、

選歌誌「玲瓏」創刊。現代歌人協会賞、詩歌文学館賞、遼空賞、斎藤茂吉文学賞、現代短歌大賞等を受賞している。

## 第二章 歌と時代

現代短歌に大きな影響力を持った歌人の筆頭に塚本邦雄をあげることに躊躇する者は少ないだろう。そして、たとえば後にあげる『水葬物語』巻頭歌が、従来の短歌の「オリーヴ油の河にマカロニを流しているような韻律」（「ガリヴァーへの献辞」）でない、「新しい調べ」（同）を求めた例であるように、塚本は新しい人間の思想への求めを方法論の中に具体化し、作品はかならずそうした方法論の華麗な典型を

なした。作品論や方法論に、あいまいな理想主義や人間主義、実人生の偶然がもたらす抒情の恩恵等々が入り込む余地のない、態度と論と作品の一体化もそれまでの歌人には見られないものである。『水葬物語』から『日本人霊歌』等で、戦後社会と人間への思想的批判的視点を鮮烈に提示、『綠色研究』では、華麗な不安の美と韻律の鬱然たる艶を具現して、塚本の文体の一つの完成を見せた。その後、中世歌謡からの摂取、より自然な心情をほのかに漂わせる文体



友人と一緒に。右から夫人、晋史、邦雄。  
(昭33年ごろ)

の混入、パロディー（風刺化）への接近などを時々の特色としてたどることはできるが、変化というよりは、言葉や題材、文体の多様なものを抱え込みつつ、後期の世界は老いがおのずから至らしめる境地といったものに決然と背を向け、歌の運命と自己、戦争という大テーマに敢然と挑み続けてきたといえよう。その方法と主題をよく表すもの、おのずから名歌が多い。

### 革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ

「革命歌作詞家」は革命歌の作詞家ということで、本来一語のもの、句またがりになっている。以下、「革命歌・作詞家に凭り・かかられて・すこしづつ液化・してゆくピアノ」というふうに、意味の切れと定型の句切れが終始ずれて、意味的なまとまりを定型律が分断しているのである。この著しい句またがり、内容と共鳴して、ある種の鋭い崩壊感覚とその源にある批判的態度を感じとらせるといえよう。革命家気取りで威勢のよい歌を作る作詞家、しかしその作詞家に凭れかかられて少しづつピアノが溶け、液化してゆく。シュールレアリズム（超現実主義）のダリの絵も思いださせるイメージである。革命歌というおめでたい紋切型の言葉で先導する者、それを喜ぶ戦後社会の明るさと偽善への嫌悪が、視覚と音韻上のイメージの両方から具体化された。主題と方法の両面において、初期の作者の世界を典型的に示す第一歌集巻頭歌。

## 燻製卵はるけき火事の香にみちて母がわれ生みたるこ と恕す

『水銀伝説』

「燻製卵」はここではキャビアをいふしたもののことらしい。それが「火事の香」であるとは、もつとも遠い喩のようにも思われるが、小さな、おびただしい数の卵が熱く燻されて香るイメージは、激しく酷く、同時にかすかに美的である。この上句と下句は感覚の上で危うく繋がる。直接的な因果関係というよりは、卵が火にさらされたという惨劇のようなイメージの中に、生まれた者はもちろん、生む者の側にも課せられた悲劇性が直感されているとでもいえようか。「恕す」といつつ、そこに漂うのは融和の気配ではない。決然とした韻律によってむしろ、本質的に悲劇的な生を生み出す母の悲劇を印象づけられるし、その悲劇性ゆえに母は恕されるのだ。このような、命を産む者としての母への根源的な憎悪もおよそ日本的な主題ではない。塚本によって開拓されたものである。

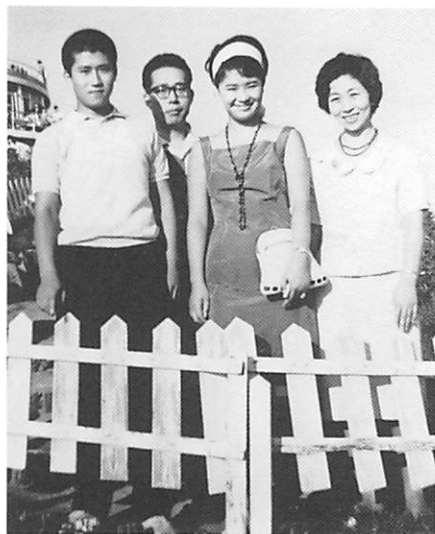
## 雉食へばましてしのぼゆ再た娶りあかかかと冬も半裸 のピカソ

『緑色研究』

この歌は『万葉集』山上憶良の「瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして惚はゆ……」という有名な長歌の本歌取りである。本歌取りのような和歌的遊戯を短歌に導入したのも塚本の功績であった。本歌の菜食と親子の平和な絆のイメージを、塚本は「雉食へば」と鮮烈で挑戦的な初句で破壊する。ピカソが八〇歳にして再婚したという事実も、またこの歌にあらわれるイメ

## (塚本邦雄)

右から夫人、九条映子（寺山修司夫人）、邦雄、青史（昭39年）



ージも、いわゆる晩年の穏やかな結婚とはほど遠い。激しく娶り、冬でも半裸に輝くピカソ。それはおよそ日本的な淡泊さや古いの境地の対極にあるもの、肉食の力に満ちた西欧芸術の栄光そのものではないか。作者は一刷毛の

憎悪とともに、その栄光を憧れるのだ。イメージの鮮やかさに加えて、本歌の抑揚もうまく利用した韻律がきわやで、厳しい初句に続いて、マ音が句頭に二度くりかえされてリズムが勢いをまし、下句も「あかかかと・冬も・半裸の・ピカソ」と、二度のア音にハ行の音が繰り返される。音の繰り返しと転換が華やかだ。このような韻律の抑揚、音の照り陰りの見事さは、「カフカ忌の無人郵便局灼けて頼信紙のうすみどりの格子」のような歌にも見え、一つの塚本の文体の完成を示す。

妻は鶴に還らざれどもゆふがほの枯れ枯れにしてうす  
ずみの網

『されど遊星』

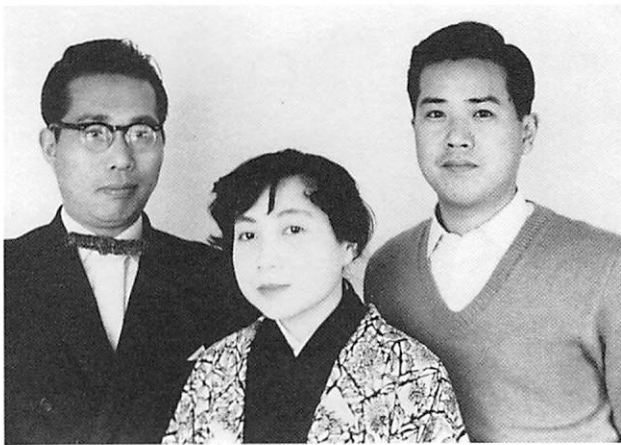
鶴の恩返しの説話では、約束を破って自分の羽で機を織っているのを見られた鶴が、男のもとから去って天に還る。また、木下順二の『夕鶴』は、鶴の献身に甘えて富み、次第に欲深くなる人間の男の俗の悲しさと、鶴の女の純粹の悲しみの対比が

澄みとおるような話だ。そして塚本は、かの鶴は天に飛び去ったが、わが妻は去らない、とうたう。決して純粹ではありえない私の俗や醜さを知りながら——。自身の俗や醜さはむしろありふれた主題だが、それが「妻は鶴に還らざれども」という視点で表現されたときの悲しみは意外なほど新鮮で、不思議な体温を湛えている。夫婦の庭に広がる夕顔の枯れ蔓を、「うすずみの網」と捉えたのも、上旬から密接につながり、なおイメージをもう一つ詩的に拡げる。『されど遊星』には、「耳搔きの羽毛ほのかに神無月まじろみてかなしみを喪ふ」など、作者のより日常的な等身大の悲しみを滲ませて、巧さを感じさせる作が多い。

### つ いふほどもなき夕映にあしひきの山川呉服店かがやき 『詩歌変』

作者の加齢の意識とともに、短歌の運命を見定めるような作品が多く生まれた。しばしば、きわめて否定的に、パロディをもって。この歌は柿本人麻呂の「あしひきの山川の瀬の鳴るなへに弓月が岳に雲立ち渡る」を想起させながら、その人麻呂以来の短歌が「いふほどもなき夕映」の中に最後の輝きを放っている、という。「山川呉服店」は日本の歌そのものの象徴だが、そのかがやきは「いふほどもなき夕映」の中のもの。ありふれて、量のみを誇る輝きのイメージなのだ。その後も、歌が減んでゆくありさまは、悲喜劇のニュアンスをもって、「山川呉服店破産してあかねさす昼や縹の帯の投売り」（『不変律』）「瑩域に白雨 山川呉服店累代の墓碑何ぞしたたる」（『献身』）等、うた

家族3人で（昭40年ごろ）



い続けられた。

### 駅長愕くなかれ睦月の無蓋貨車処女ひしめきはこぼる 『詩歌変』

一首は菅原道真が讒言によって太宰府に左遷される時に作った漢詩の一節をもとにしている。「駅長莫驚時変改、一栄一落是春秋」。塚本はこの最初の詩句をそのまま用いて、丈高くうたいだす。一月の寒気を引き裂いて、無蓋貨車が通りすぎてゆく。そこにひしめいていたのは、恐怖にゆがみ、あるいは無表情になった無数の少女たち。貨車が通りすぎるただ一瞬のイメージはたちまちに、つねに有無をいわさず運ばれて行く戦時の少女たちの姿を呼び起こす。アウシュビッツに連行されるユダヤ人の少女、従軍慰安婦としてつれ去られた植民地の少女。しかもそれは過去のことではない。今、目の前を通り過ぎる風景、ごく近い未来の暗い余兆として、時間をこえた危機の風景として作用する所に、このイメージの手法の雄弁さがある。戦争云々という表現は出てこないにもかかわらず、全体に漲る緊張感、直感としてたしかに戦争の危機感を呼び出して、暗い華麗さも

感

漂う見事な暗示力である。ちなみに、作者は『日本人霊歌』跋文に「短歌といふもつとも古典的な定型詩の内蔵する、重要な機能の一つである暗示力をつよく喚起して、一種の暗示録的世界を形成し、その時間と空間をこえたりアリティをもつて今日の現実の世界に参加しよう」と試みた。」と述べた。初期から一貫する作者の暗示の方法と、後期にいよいよ重くなる戦争の主題を代表する一首である。

### 第三章

### 短歌史におけるポジション

「もともと短歌といふ定型短詩に、幻を見る以外の何の使命があらう。」（『夕暮の諧調』所収「短歌考幻学」という言葉が、塚本のあざやかな反写実、反近代の宣言であった。「幻想」とは、「現実社会を瞬時に変質し、新たな世界が生まれでる予兆を、直感によつて言葉に書きしるす」ことであり、命令されず制禦



秋の叙勲記念パーティー（平成5年）

## （塚本邦雄）

されず、いかなる権力の強制も及ばない、とも述べる。必然的に、幻想する歌人は「異端者」「反逆者」である。塚本の前には、前川佐美雄ら昭和初期のモダニズム派、芸術派とよばれた「前衛」歌人たちの営為があったが、塚本は戦時における彼らの挫折をまのあたりにしつつ、「幻想」、具体的にはまず「斬新なメタファー（暗喩）」と「アレゴリー（比喩）」の方法による魂のリアリズムを強烈に望んだのである。篠弘は、近藤芳美や宮柊二らの新歌人集団に近代短歌の下限を見、現代短歌の起点を「昭和二十年代末から三十年にかけて、前衛短歌が開花した時期におくことができる。」とした。塚本を中心とする前衛短歌の出現によって、人間の内面や思想の表現が方法への視点をもって探られるようになり、短歌表現の可能性は飛躍的に広がったのである。

三十年代から四十年代初め、前衛短歌運動の成果は、同時代歌人それぞれの場に持ち帰られてさまざまな実を結んだ。その後、より若い福島泰樹や三枝昂之らは、岡井の思想性に重きを置いた撰取の跡を見せ、高野公彦や河野裕子らには塚本からの感覺的な撰取の跡を多く見ることができ、高野らいわゆる内向派と呼ばれた歌人たちの世界は、塚本的な批評性においては淡いものだったが、感覺の繊細で日常的な場からの暗示性の試みや生の不安の表出の中に、前衛短歌がより日常的な身体と感情の表現として敷衍されていった跡は見えるのである。

（よねかわ・ちかこ）「かりん」編集委員

※次号は岡井隆（筆・花山多佳子）です。